

第1分科会	— 学校経営 —
研究課題	創意と活力に満ちた学校経営
研究発表題	学校経営ビジョンが息づいたスクールプランの策定と改善 ～具現化と学校評価の活用～

小浜市立今富小学校長 平井 和雄

I 研究の視点

昨年度は、誰1人として考えることすらできなかった新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るった年で、今もそのコロナ禍は続いている。しかし、「ピンチはチャンス」という言葉どおり、このような状況であるからこそ、明確な「学校経営ビジョン」が校長に求められた。つまり、学校において、本当に必要な教育活動は何か、それはどうしてかという、今まで「当たり前」と考えていたことを、学校経営ビジョンに照らして考えた年であった。本研究では、その「学校経営ビジョン」を改めて確認し、スクールプランに具現化する方法について考察する。

II 研究の概要

学校経営ビジョンは、校長の意思であり、学校内外に明示するスクールプランのベースとなっている。この学校経営ビジョンを校長がどのように考え、教示し、それに対して職員



の意識をどのように高めていくかについて、本研究で紹介する。

また、学校経営ビジョンをベースとしたスクールプランの策定及びその具現化について紹介する。その中で特に策定と具体的な実践を報告することで、各学校の参考としていただきたい。さらに、学校評価を生かした学校経営ビジョン（スクールプラン）の改善についても紹介し、次年度の学校経営ビジョン（スクール

プラン）の改善につなげていただきたいと考える。

本研究は、小浜市小学校長会として取り組んだ。市内9小学校の取組を紹介していくが、実践活動では、発表校の活動を中心として報告していることを、ご承知いただきたい。

- (1) 学校経営ビジョンについて
- (2) スクールプランの策定について
- (3) スクールプランの具現化の実践
 - ① 「サバマン」の企画・販売・PR（心）
 - ② 校内授業研究の充実（頭）
 - ③ 一輪車パレードに向けた取組（体）
- (4) 学校評価を生かしたスクールプランの改善

III まとめ

「学校経営ビジョンが息づいたスクールプランの策定と改善」について、報告をしてきた。策定と改善については、各校で実践が図られ、大きな成果を上げている。しかし、この研究において、その手法が多様であることが分かり、今の取り組み方が本当に自校に合っているのかを再確認することができた。また、策定するときにも、改善するときにも、児童・教職員・地域の現状を的確に把握することが大切である。そして、校長としてどのような児童像・学校像を描くのか、その実現のために必要とされる資質・能力は何かを突き詰めていかなければならない。

そして、自分の学校経営ビジョンを「覚悟」を持ってスクールプランに反映させ、児童や教職員とともに、素晴らしい学校経営に取り組んでいきたいと考えている。

古川 校長のスクールプランは経営ビジョンを基に作成するという考えに賛同する。大野市ではすべての学校で、教育計画に経営ビジョンとスクールプランの両方を掲載している。

橋本 本校（三国南小）も伝統校で「ふるさと」が大きなテーマである。今、あるプロジェクトを計画中。再度、経営ビジョンにふるさと教育を位置づける熱い思いを聞かせてほしい。

発表者 私が敦賀にいたときに、地元の方は「ここは何もないところ」と謙遜されていた。そこで、ふるさとを愛し、誇りに思い、ふるさとに役に立つと人育てるべきだということに気づいた。

司会 経営ビジョンが息づいたスクールプランをどう策定していくかという点はどうか。

多田 岡本小学校は越前和紙の産地にあり、本校内にも和紙を作る部屋がある。この地域や学校の特色、および子どもたちの実態などから、育てたい子どもの姿を学校経営ビジョンに反映させていった。悩みは、ビジョンやプランをいかに各先生方に浸透させていくか、日頃の教育活動の中でどう意識付けさせていくかということ。耳にたこができるくらい言い続けているが、よい方法があれば教えていただきたい。

淵上 昨年度、校長として赴任して（コロナ禍の休校で）子どもが見えない中でスクールプランを立てることにプレッシャーがあった。そこで、以前からの職員に話を聞いた。内外海地区はよっぱらいサバやへしこの生産が盛ん。児童もへしこやなれずしといった伝統食を体験で作る。そういった特色を経営ビジョンにどう組み込むかがわからなかった。昨年度は、先生方のやることをじっくり観察した。今年度は心に着目したビジョンを示したが、（浸透のさせ方は）繰り返し伝えることの他に、学期毎に出す校長のおたよりなど、いろいろな方法で職員に伝えるようにしている。

司会 どのようにしてスクールプランや学校評価を次年度に伝えていくか。

向井 日頃の教育活動をやりながら、来年度のベースを作り始めることを行っている。もし来年度、自分が異動となれば、自分がやってきたこと、継続したいことを伝えられるように、ある程度の形を作っておくように心掛けている。

司会 年度の後半から、次年度の準備を始めることに共感する。

宇野 今年度、本校（越廼小）に赴任して、まずは教職員の話を聞き、子どもたちをどう見ているかということをしっかり把握した。あわせて、業務改善上、継続していくことと縮小していくことのメリハリを付けることは大切ではないか。本校は完全複式学級で、地域としても高齢化が進む中で、人口、勤労者世帯が減少している。そのような中で、学校が核となって地域を元気にしていきたい。また、中学校と連携していきたい。最近、三重県の高校を中心としてSBP（ソーシャルビジネスプロジェクト）を進める学校が出てきた。非常に見習う点が多いと思う。本校は、今日の午後、福井駅前で越前海岸を代表するすいせんの配付を行う。子どもたちが地域をPRする活動として捉えていただきたい。

道関 平泉寺小学校と今富小学校とは、日本遺産つながりで修学旅行のときに交流している。勝山はユネスコスクールに全学校が参加しており、SDGsでめざす目標を入れ込んだESD（持続可能な開発のための教育）カレンダーがプログラムされている。本校のスクールプランの核は、学校が地域の担い手となること。ミドルリーダーと話し合いを重ね、今年の核は平泉寺の語り部活動とした。日本遺産フェスティバルで一乗小学校とともに発信も行った。このようにスクールプランの具現化をしている。

知場 ビジョンの作成→スクールプランで具現化→実践→評価の流れで、初年度は苦しかった。職員会議等、その都度スクールプランについて具体的に話してきた。今年は3年目で、先生方との考え方のすり合わせができて学校経営が安定している。来年度、さらにこれを発展させていきたい。

（文責：鯖江市北中山小学校 小田島 範和）

第2分科会 — 知性・創造性 —
 研究課題 知性・創造性を育む教育課程
 研究発表題 全ての学級、授業、活動で質の高い学びを保障する「学校力」を培うことを目指した実践

大野市下庄小学校長 大石 貴昭

I 研究の視点

一人一人の学びを保障し確かな学力を育む教育課程を編成すること、そして、それを実践していくための校長の役割と指導性について考える。(新任1年目からの実践)

II 研究の概要

(1) 教育課程の再編

① 赴任校の現状と課題を認識するまでの実践

- ア 求められる学力、授業を知る。(1年目4月～)
 - ・県教委事業を活用して研究会毎に指導主事から指導をいただいた。(4/10の研修会から十数回)
 - ・教師自身が学力調査問題を解き正答を確認した。
- イ 教師一人一人が教師の使命を自覚する。(10月)
 - ・担当学級の指導に対する教師個々の「思い」や具体的な取組を書きまとめ、全教員で共有した。
- ウ 先進校、伝統校に学ぶ。(10月～)
 - ・県外の研究伝統校に9人(翌年は20人)派遣した。校長自身も視察した。

※ここが一つの転機!

- *本校との違いに愕然とした。
- *学校のあるべき姿を見たように感じた。
- *朝礼で「どこにも負けない小学生にしたい」

② 教育課程の再編に向けての実践

- ア 今後の取組の方向性を定める。(11月～)
 - “フリートークを核とした学校改革”
 - ・方向性について全職員で確認する日を1月末と決めて、その準備を研究担当と共に始めた。
- イ 小さなことから取り組み始める。(12月～)
 - ・聴くときは話す人の方に体を向ける。
 - ・1時間に1回は意見交流の機会を設ける。
 - ・下足を揃えて入れる。「おくドン」 etc
- ウ 全職員で取組の方向性を確認する。(1月)
 - ・1月中旬に研究担当が具現授業を公開した。
 - ・1月末の校内研究会で授業提案者が研究の方向性を具現化した授業に挑戦した。(11月から校長と研究担当と授業者で授業づくり)

- ・同研究会で研究担当が今後の取組の方向性と目的、その理由等を提案した。

- エ 学校教育目標を改訂する。(1月)
 - ・具体的な中期目標(3年計画)を定めた。
- オ 取組の方向性を自分事として自覚する。(2月)
 - ・10月にまとめた個々の取組を更新した。
- カ 教育課程再編案を作成する。(2~3月)
 - ・改訂した学校教育目標に合わせて全職員で教育計画を全面改正した。
 - ・総合的な学習の考え方や内容を一新した。

③ 目標達成を目指すための環境を整備する実践

- ア 家庭・地域の理解を深める。(1月～)
 - ・学校だより、学校公開で考え方を示した。
- イ 教員の業務を改善する。(1月～)
 - ・家庭地域学校協議会やPTA役員会で取り上げ、各会から通知を出すなど家庭・地域の理解を深め、行事の精選などを積極的に行った。
- ウ 学校全体で取組を推進していく。(2年目4月)
 - ・全ての学年でクラス替えを実施した。
 - ・全ての学級で授業の出入りを多くした。

(2) 教育課程編成後の実践と研究の推進(現在進行中)

① 具体的な取組内容 ※別紙参照

★令和3年11月13日(土)に教育公開!

② 研究推進に効果的であったこと

- ア 校長と研究主任で、管理職と学級担任・授業者の両面から推進する。
 - ・校長は指示と提案の後押しをした。
 - ・研究主任がモデル(学級・授業)を公開した。
 - ・校長も集会や全校行事等で実践した。
- イ 学校外に公開、周知、拡張する。
 - ・目指す姿を中学校区研究会で共有した。
 - ・他校教員や教育関係者等に広く公開した。

III まとめ(4年目を迎えて)

取組の継続・発展には、児童の学びと育ちをつなぐ教師の指導力とそれを支える校長の指導性が課題となる。

第2分科会 知性・創造性 研究協議記録

研究課題 知性・創造性を育む教育課程

研究発表題 すべての学級、授業、活動で質の高い学びを保障する「学校力」を培うことを
目指した実践

発表者 大野市下庄小学校長 大石 貴昭

西村 フリートークを核とした学校改革についての素晴らしい実践を聞くことができた。フリートークを活用した、学びの場について具体的に教えていただきたい。

発表者 すべてのクラスでフリートークを取り入れた。フリートークの質は、低中高と学年が上がるにつれ高まっていき、モデルとなる学級も育っていった。2年目の7月には、「自分たちのあいさつについてどう思うか」という投げかけに対して、数名の児童が語り始めた。

学級で培ったフリートークの力を試すために、避難訓練や全校での行事でも、意図的にフリートークの場を設けている。高学年は低学年のさらによいモデルになるために、学級に持ち帰って、対話の在り方について振り返り、再構築してさらに成長できるよう促している。

竹中 言葉をつなぎ広げていく、児童の姿に大変感銘した。次の3点について教えていただきたい。

- ①実践の結果、子どもの学力はどうか。
- ②緘黙児童や特別な配慮が必要な児童が、フリートークをする際に配慮していること。
- ③学校力の本質について

発表者

①学力調査の結果だけを述べれば、2年目は向上し、3年目は低下している。ようやく石垣を積み場所が決まったところ。1段目をどのように積んでいくかを、試行錯誤している段階である。フリートークの実践は、児童の学力向上にはまだつながっていないが、児童の授業に臨む姿勢は確実に変わった。

②話をすることが苦手な児童については、聞いて考えて、少しでも伝えることに挑戦させる。結果的に話さなくても、そこに学びがなかったわけではない。認めることで次の意欲につなげる。

③どの先生が担任になっても、ある程度質の高い学びが保障できることを学校力の本質と考える。経験が浅い深いに関わらず、教師には技量の差はある。たとえ、教師が魅力ある課題を設定できない時でも、児童に学ぶ力がついている。これが学校力と考える。

清水 11月13日の教育公開に参加し、貴校の授業や全校集会の様子を参観させていただいた。今日の発表を聞いて、これまでの背景がよく分かった。

3年生の算数では、自分の考えたことをクラスの全員に聞いてもらうことを実践していた。発表が重なることはなく、つなぐことが浸透していると実感できた。集会では、沈黙を恐れず、児童の力を信じて、児童が発表するのを待つ教師の姿があった。

素晴らしい実践を皆さんと共有したいと思い、感想を述べさせていただいた。

牧井 大野の子どもたちの純朴さに改めて感心した。コロナ禍の中、研究を進めていくために苦労したことを教えていただきたい。

発表者 新型コロナウイルスの流行で、よかったことは正直一つもなかった。本来ならば3年目の昨年、教育公開を行う予定だったが、約3か月間の臨時休校期間は全くの空白。その間、教員の異動もあり、赴任してきた教員に、児童の姿、特にフリートークの様子を見せることができなかった。学校再開後も、対話ができない状況で、研究は1年ぐらい停滞していた。

(文責：鯖江市立待小学校 藤枝 美由紀)

第3分科会 — 人間性・健康 —

研究課題 豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程

研究発表題 自分の大切さ・他の人の大切さを認める人権感覚の育成

～ポジティブ教育・協同的学びを通して～

池田町立池田小学校 無量小路 宗洋

I 研究の視点

人権感覚は、児童に繰り返し言葉で説明するだけで身に付くものではない。学級をはじめ学校生活全体の中で自らの大切さや他の人の大切さが認められていることを、児童自身が実感できるような状況を生み出すことが大切である。個々の児童が、一人の人間として大切にされているという実感をもつことができるときに、自己や他者を尊重しようとする感覚や意志が芽生え、育つからである。

池田町では、平成30年度より、幼小中合同研究会でポジティブ教育の研究を、令和元年度より、小中学校で協同的学びの研究を推進している。

よりよい社会を創るという目標をもち、自らの幸福な人生を切り拓いていくために求められる資質・能力をポジティブ心理学の知見を用いて社会と共有・連携しながら育成するポジティブ教育。

子ども同士の聞き合いや話し合いによる協同学習を行うことによって、すべての子どもが主体的に学習に取り組むことを目指す協同的学び。

この二つの研究は、人権感覚を学習の中で育成できる実践である。3年間の研究推進に関して、校長の役割と、人権感覚の育成に関係の深い実践を紹介したい。

II 研究の概要

(1) 研究体制の整備

- ① スクールプランへの位置づけ
- ② 人権教育計画への位置づけ
- ③ 教育総合研究所・大学との連携

- ア ポジティブ教育（幼小中合同研究会）
- ・立命館大学教職大学院 菱田準子教授
 - ・県教育総合研究所
- イ 協同的学び（協同的学び研究会）
- ・学習院大学 佐藤学教授
 - ・福井大学教職大学院 木村優准教授
 - ・町教委 教育企画官

④ 地域との連携

- ア 町社会福祉協議会
- イ 人権擁護委員会

(2) 具体的な実践

① ポジティブ教育の取組

- ア ポジティブ授業（5大栄養素・レジリエンス）
- イ 5大栄養素・レジリエンス教育の日常化

② 協同的学びの取組

研究主題 子どもが楽しく学び合う授業の創造
～聞き合うことを大切にした協同学習～

③ 福祉活動の取組

ミライレンジャー（子ども福祉委員事業）

④ 人権集会

III まとめ

(1) 成果 児童の変容

- ・他の人を理解しようとする言葉かけが増えた。
- ・お互いの良かったところを書いたり、感謝の言葉を言えたりするようになった。
- ・前向きな発言が増えた。

教員の変容

- ・チームで取り組むようになった。
- ・子どもたちの言動を肯定的にとらえられる。
- ・人間性を育む指導が向上した。

(2) 課題

- ・ポジティブ教育のカリキュラム化
- ・朝の会や帰りの会などをうまく活用した、児童にも教員にも負担のないやさしい実践の共有
- ・ジャンプの課題の蓄積

校長は、関係諸機関との連絡調整を積極的に行い、子どもたちの人権感覚の育成に効果的なカリキュラムマネジメント・研究体制の整備にリーダーシップを発揮しながら、児童一人一人が自分も他の人も大切に、幸せに生きることのできる教育環境整備に力を尽くさなければならない。

第3分科会 人間性・健康 研究協議記録

研究課題 豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程

研究発表題 自分の大切さ・他の人の大切さを認める人権感覚の育成
～ポジティブ教育・協同的学びを通して～

発表者 池田町立池田小学校長 無量小路 宗洋

<発表内容について>

西野 鯖江市でもポジティブ教育を昨年度から取り入れている。しかし、まだまだ自己肯定感や自己有用感が低い児童が多い。自分が若い頃に、池田町の小学校に勤務した当時は、小規模校のデメリットとして、子どもたちの序列化や人間関係が固定化してしまうことがあったが、現在はどうなのか。そして、児童の自己肯定感や自己有用感の実態はどうか。

発表者 ポジティブ教育に取り組んでいることもあって、人間関係の固定化は解消されてきたのではないか。また、自分のいいところ探しなどの実践で、子どもたちの自己肯定感や自己有用感も高まってきていると感じる。

宮本 自分も池田町で育ったが、昔は池田町を出たいと思っている子が多かった。その後、教師として池田町の学校に勤務し、子どもたちを見ていると池田町を大事にする子が多くなっていると感じる。また、自分のいいところ探しは実際に自分でやってみると見つけるのが難しいと感じた。他人と比べて優れているところを探すのではなく、自分がしていることを見つめ直して、一つ一つ認めることが自己肯定感や自己有用感を高めることにつながると思う。

塩谷 自校でも、昨年度から坂井中学校区で小中学校ともにポジティブ教育に取り組んでいるが、池田小はこども園から始めていることを聞いて参考になった。また、ポジティブ教育が特別なものではなく、日常化されていることもすばらしいと感じた。発表にあった5年生の「ミライレンジャー」の取組はすばらしいが、他の学年はどのような取組をしているのか。

発表者 3、4年生は老人クラブの「ドリームカンパニー」と連携して、野菜の栽培や販売に取り組んでいる。6年生は「池田町のいいところさがし」として、県の事業のCM作りに取り組んでいる。

伊部 学校の規模にかかわらず、きめ細やかな教育を進めるうえで、ポジティブ教育の必要性を感じる。またポジティブ教育に関しては、特別な授業の中だけでなく、日常の授業や教育活動全体を通して取り組んでいくことが今の学校に求められている。

<人権教育に関する各学校の取組について>

吉村 GIGA スクール構想を積極的に進めている。特に、Teams を使って授業だけでなく、クラブ活動や委員会活動においても一人一人の意見や考えを自由に交換している。そのことで、他者への理解が進んできていると感じる。

前川 12月の人権週間に向けて、学校全体で人権教育に取り組んでいる。その中で、クラスごとの人権宣言をしたり、図書室には人権に関する本のコーナーを設けたりしている。また、人権に関する全校集会を開いて、「親切な友達」という読み聞かせや、「ありがとうの輪をつなごう」という縦割グループでの活動を計画している。

兼上 校区の社会福祉協議会や高齢者・障がい者施設との連携を進めている。「心のバリアフリー講座」として、障がい者スポーツ体験を行う予定である。

今村 自校の教職員に対しては、子どもたちのいいところを探してほしいと日頃から伝えている。また、子どもたちには先生のいいところ探しも見つけようと呼びかけている。さらに、道徳教育を充実させることや、社会福祉協議会と連携してブラインドウォーク・車いす体験などを行っている。いずれの場合にも、なぜその活動を行うのかという目的意識をしっかりと持たせることが大切だと思う。

石橋 子どもたちの人権意識を高めるために、まずは教職員が人権意識を高めることが重要である。校長として、常日頃から教職員に対して、子どもたちが相手を思いやる心を育てる指導を心がけるように伝えている。子どもたちは、西津地区公民館を月に3回訪問して、老人との交流を深めている。

(文責：鯖江市鳥羽小学校 澤田 博孝)

第4分科会	— 人材育成 —
研究課題	学校の教育力を高める研究・研修とミドルリーダーの育成
研究発表題	(1) 教員の意識改革を促し、資質・能力の向上を図る研究・研修の推進 (2) 確かな展望と豊かな人間性をもち行動できるミドルリーダーの育成
	敦賀市立敦賀南小学校長 藤岡 真也

I 研究の視点

「GIGA スクール構想」元年となった令和3年度。世界的パンデミックとなったコロナ禍による非日常の日常化を踏まえ、学校教育は大きな転換を求められている。そこで、児童および教員に配備された一人一端末タブレットを効果的に活用し、教員の資質・能力の向上さらには、ミドルリーダーの計画的な育成を図ることとした。

研究課題との関連は以下のとおり。

(1) 従来の研修の在り方を、形態・内容・方法を変えることにより、教員の意識改革・働き方改革を併せながら資質・能力の向上を図る

(2) ミドルリーダーがタブレット等を利用し、研修および報告・連絡・相談を円滑に行い、発信力や統括力の向上を図る。

II 研究の概要

(1) 教員の研修・研究の意識改革

常に変化していく教育ニーズに対応するには「学び続ける」教師でなければならない。多様な実施形態・方法や内容を取り入れ、主体的・効果的に研修・研究に取り組ませ教員の意識改革を図ることとした。

【研修形態・方法】

「遠隔型（オンライン）」……遠隔システム利用

「遠隔型（オンデマンド）」……Web等の配信や

動画サイトを活用し都合のよい時間に研修

「プチ研修型」……15分以下の研修を終礼で実施

【研修内容】

「他校連携」……小中連携・小小連携で企画

「他機関連携」……内容は他機関が企画

「配信コンテンツ利用」……民間コンテンツ利用

「アウトソーシング型」……専門家を招聘

【具体的実施例】

- ① 職員会議の一部を利用し研修を実施
 - ・iPadの使い方研修
- ② 終礼・週案等を活用したミニ研修
 - ・アプリの使い方、服務研修
- ③ 嶺南教育事務所と連携した遠隔研修
 - ・Zoom利用のオンライン研修
- ④ 配信型動画コンテンツ利用研修
 - ・いじめ、自殺予防、SDGs、防災等
- ⑤ 市教研（小教研）を遠隔会議で実施
 - ・定例会を遠隔型で実施

- ⑥ 外国語活動の2校間交流授業
 - ・外国語専科教員および外国語支援員による2校間の交流授業を実施
- ⑦ 全国学調の弱点補強を小中連携で実施
 - ・中学校教員による遠隔授業
- ⑧ 専門機関へのアウトソーシング研修
 - ・越前焼の専門家を招聘し、ふるさと教育の経験を実体験
 - ・ネットスマホ教室を携帯キャリア社により遠隔で実施
 - ・義務教育課外国語担当指導主事を招聘

- (2) ミドルリーダーの資質・能力向上
主任級教員の発信力・統率力を向上させるためにタブレットや遠隔システムを活用した。

【発信力の向上】生徒指導主事・保健主事等

- ① 生徒指導主事が全校集会を遠隔で実施
 - ・全校集会での生徒指導講話
 - ・集合する必要がないため即時実施可能
- ② 保健主事が給食時に保健指導を遠隔で実施
 - ・コロナ対策の無言、前向きのお食事時に養護教諭と協力し感染症対策、熱中症・食中毒予防等発信
- ③ 動画配信教材の作成
 - ・若手を中心とした休校時の学習動画配信

【統括力の向上】教務主任、研究主任他各担当

- ① GoogleWorkspaceを利用し、ペーパーレス、会議時間短縮、報連相の徹底を推進
- ② 共有クラウドによるカリキュラムマネジメントおよびスケジュール管理
- ③ デジタル連絡帳の導入・活用による情報発信力の向上

III まとめ

以下の成果が見られた。

- オンデマンド・プチ研修は、教員の負担が減り、主体的に研修する意識を高める。
 - 発信力の向上は授業改善に転用しやすい。
 - 教務系でのタブレット活用を推進することにより、時間を使わずに報連相を徹底できる。
 - 自己発信型は論理的思考を向上させる。
- 今後もタブレットや遠隔システムを活用した校内改革を推進することにより、業務改善、研修の充実、人材育成を同時に達成させていきたい。

第4分科会 人材育成 研究協議記録

研究課題 学校の教育力を高める研究・研修とミドルリーダーの育成

研究発表題 (1) 教員の意識改革を促し、資質・能力の向上を図る研究・研修の推進
(2) 確かな展望と豊かな人間性をもち行動できるミドルリーダーの育成

発表者 敦賀市立敦賀南小学校長 藤岡 真也

明石 職員会議が大変短くなったということだが、職員会議に入る前の準備について教えてほしい。また、保護者に連絡帳のようにデータ配信をしているということだが、情報セキュリティーの面でのどのような配慮をしているのか。

発表者 職員会議自体は15分分からない。理由は、終礼で必要なものはやってしまうから。職員会議では協議というよりも共通理解を図ることが目的となるので、協議をする場合には主任会や企画委員会でやってしまう。ただ子どもの情報交換については時間をとるようにしている。また、データ配信だが、C4t hを使っているのでセキュリティーについては問題ない。クラウドにあげて、それを保護者がパスワードを入れて見る。

橋本 本校は ICT 活用の面ではまだまだ足りないと思うが、出来ることから職員や保護者と相談を進めながら取り組みたいと思った。本校でも職員会議でタブレット活用を進めており、メモがとれるアプリも入れている。タブレット会議を進めるうえで気をつけなければならないのは、支援員への連絡漏れがないよう気をつけることである。

発表者 支援員への連絡については気を張っていて、その方々へは紙媒体で配布することを続けている。敦賀市では、授業を行う「教諭」へはタブレットが配布されているが、支援員へは配布されていないので、学校が自前で持っているものを共有で使っている。今後のことを考えると、全職員への配布が必要になってくると思う。各学校の配備はどのような状況か。

運営委員 各学校の配備状況を教えていただきたい。(市町毎に運営委員から質問)

→ ほぼどの市町も授業を行う教員までは配備されているが、支援員等まではなかなか行き渡っていないと回答。

岡崎 坂井市は中学校区での連携事業を行っているが、敦賀市の中学校区で同じ方向性を持って何かを進めていくような組織があるのか。

発表者 敦賀市は、教育委員会が教育振興基本計画に中学校区で中中連携等を進めていくと述べており、中学校区で組織が出来ている。例えば、すべての中学校区毎に ZOOM で繋がるようになっている。子どもの交流や学調の補習授業のことなどにも力を入れるよう指示もされているので、やらなければならないという状況である。

田倉 職員研修に ICT 機器を積極的に活用していることに目から鱗の思いがした。また、負担感無く外部の専門の方を呼ぶことは、教務主任や研究主任、管理職の役目なのでアンテナを高くして進めていく必要がある。そして、校長自身が意識を高く持たなくてはならないと感じた。

発表者 今回の遠隔が普通に行われる状況の中でわかったことは、例えば私が他校の ZOOM の設定を行なったように、ICT 機器の活用において得手不得手があつて当たり前である。したがって自分の学校で何もかもするのではなく、得手な学校にお願いすればよいし、せつかくこのような校長会があるのなら、その関係を活用すればよい。他校と連携するべきである。

柿本 学校間の連携について、敦賀南小学校の取組は群を抜いて進んでいる。本校が外部講師(弁護士)の講演を依頼した時も藤岡校長先生に助けていただいた。

塚本 ネットの不具合があり、やっと今つながった。レジュメを拝見することしかできなかったが、発表者の取組は素晴らしいものであり、タブレットを使った研修やミドルリーダーの育成、学校間の連携等、大変今後の参考となるものである。

(文責：鯖江市豊小学校 伊藤 誠道)

第5分科会 — 危機管理 —

研究課題 子どもを取り巻く様々な危機への対応

研究発表題 いじめや不登校などを生まない学校づくりと危機管理システムの構築

丹生郡越前町立織田小学校長 渡辺 徹

I 研究の視点

本校は、丹生郡（越前町）の中央、丹生山地の中の盆地にあり、周りを山に囲まれているが、土砂災害や水害等は比較的少ない。校舎は木造2階建てで、教室は2クラス分がオープンスペースで繋がっており、児童数減少のため1学年で2クラス分の広さを使用している。反面、学級同士の様子は棟を隔てているため「声は聞こえど姿は見えず」を越えて、声も姿も見聞きしづらい。

本年度は、児童数123名、教職員数15名で（支援員等除く）、1人1人の指導や支援をしていくには申し分ない。このような環境の中であれば、いじめや登校しぶりなどの様相を示す児童がいないかと問われれば、「いる」と答えなければならない。いじめや不登校、登校しぶりについて、私が見てきた限り、「いきなり」ということはほぼなかった。状況が顕著になるときは、傾向があり前兆があった。いち早く傾向や前兆を捉え対応していくことが早期対応となり、発生しても深刻になりにくいと考えている。今年度、本校は若年層の教員が増加し、学習指導はもとより、生徒指導、子どもを取り巻く問題対応への理解等の違いも出てくる。校長として、学校としての対応について理解させ実践させることで、いじめや不登校を生まない学校を継続してつくっていきけるよう努めている。

II 研究の概要

(1) 各種アンケート、教育相談の実施

- ・児童に、学校や家庭での生活（いじめ、問題行動等を含む）について生活アンケートを行い、その結果をもとに個人面談を行っている。1, 2学期末には保護者へのアンケートを行い、家庭でも子どもへの気付きを記述してもらっている。
- ・教職員に対しては児童理解アンケートや「気付きのポイント」でチェックを行いながら、多方面からの気付きを記述している。
- ・各アンケートは、即時回覧し、共通理解や教育相談の資料とする。相談内容、指導支援内容は

アンケートに記録し保存している。

(2) 「気になる児童」対応マニュアルの作成

誰がどの学年を受けもっても、欠席や早退・遅刻しがちな児童、気がかりな児童等と同じ対応ができるようマニュアル化し、状況を各シートにより記録し残すようにしている。

ア 電話連絡シートや「気付きのポイント」による状況の記録

イ 家庭訪問シートによる気付きの記録

ウ ケース会議シートをもとに対応を検討

(3) 児童の継続支援

「おたっ子引き継ぎシート」を作成することで保育所（園）の引き継ぎから卒業時までを経年のにまとめ、指導、支援事項や気付きを記録し継続して指導、支援できるようにしている。

III まとめ

(1) 成果

- ・定期的にアンケートを行い、相談や支援に生かすことで児童の悩み解消に役立っている。また、保護者や教職員からのアンケートにより多方面から児童の指導、支援ができています。
- ・気になる児童へのマニュアルを作ることで、どのクラスも同じような対応をしており、学校としての姿勢を示すことができています。

(2) 課題

- ・各種アンケートの集計、保管が大変である。データの処理やすぐに参照できる方法について工夫する必要がある。プライベートなことなので、情報の管理についても留意していく。
- ・「～ファイル」「～シート」の類が多い。整理していかなければならない。（ファイルふくいっ子、おたっ子ファイル、…）

子どもたちの出す違和感や小さな変化などに、いち早く気付くことで、悩みや不安等、一つでも多く対応し解決できるようにしたい。教職員の「気付きの感度」を上げていくことにも、校長は強いリーダーシップを取っていかなければならない。

第5分科会 危機管理 研究協議記録

研究課題 子どもを取り巻く様々な危機への対応

研究発表題 いじめや不登校などを生まない学校づくりと危機管理システムの構築

発表者 越前町立織田小学校長 渡辺 徹

佐々木 児童クラブでの苦情やタブレット使用による問題が学校に寄せられたとき、どのように対応しているか。

発表者 児童クラブでの問題はクラブが対応している。児童クラブには毎月訪問し、連携を密にしている。タブレットは十分に安全対策の指導ができていないため、基本的に持ち帰りはしていない。

斎藤 タブレットもその一つだが、新たな危機管理上の課題が次々生まれている。情報モラル以外に、気を張っていることがあれば情報がほしい。

松田 オンラインゲーム上でのトラブルは地域をまたいで起きている。学校以外の場所で生まれている危機的な状態には入り切れていない面もある。働き方改革で電話対応にも時間の制約があり、ジレンマがある。いじめ等については、子どもたちの発信力が低下し、アンケート等で表出しないこともある。子どもの数は減っているが、子どもの質的な問題は多岐にわたっており、低学年担任や支援員は苦労が多い。

野村 発達段階に応じた系統的な計画によって情報モラルの指導をしている例があれば知りたい。問題が起きたとき、場当たり的にならないよう指導を積み上げていきたい。

久保 保育園から中学校までを一枚にまとめた引き継ぎシートがとてもよい。不登校等になってしまった場合、一覧できる情報は新任者にとっても助けになる。いつ作成し、どのように引き継いでいるのか教えてほしい。

発表者 年度末に作成しているが、気づいたときに入力していくのが一番よい。保護者から苦情が寄せられたとき、このシートに対応の仕方が記録してあり参考になった。

牧野 近年気になるのは、子どもに質問すると代わりに大人が答えてしまうこと。気づきの感度を上げることが大切であると同時に、小規模校では大人がすぐに手を出してしまうところも課題。織田小ではどうか。

発表者 教員によって気づきの感度があまりに違うことが気になり、同じ視点で子どもを見ていくことが重要と考えシートを作成した。すぐに手を出

す、手をかけすぎることには問題かもしれないが、確かな視点で子どもを見る・見守ることが大切だと考える。大人への呼びかけは、学校便りで校長としての考えを掲載して納得を得たいと思っている。

志田 気づきの基準について、子どもたちが見えすぎて子どもがづらいのでは、と思うこともある。支援員を多く配置してもらっていて、すぐに対応してくれるが、それでよいのかと思うこともある。引き継ぎシートは校種をまたいだ記録であり、慎重に扱っていかねばならない面もあるのではないか。C4thの「いいとこみつけ」を有効に活用するなど、あれもこれもでなく統一したものがあるとよい。

中屋 校区の地図に世帯の位置を入れて誰でも家庭訪問できるというのがよい。新任者には校区の把握も課題。コロナ陽性者が出たとき、一斉下校からの引き渡しを想定していなかった。いろいろなケースを想定しておくことが重要だとわかった。

小林 本校は21学級あり、子どもを見る視点については、教員によって差がある。学年主任を中心に対応しているが、行き届かない点はある。

高橋 風通しのよい職場であることが大切だとつくづく感じる。本校は規模が小さく、全教員が全児童の状況を把握し、変わった様子があれば早めに対応できていることが何より役立っている。

檀尾 本校も小規模で全児童を把握しているとともに、地域とも連携しいろいろな情報をいただいている。シートが多くて困るのは同じで、考えなければならぬと思っている。

杉谷 マニュアルを作って丁寧にアンケートをとっているのがすばらしい。参考に作ってみたい。書類の保管については、アンケートフォームを取り入れてデータ化している。情報の管理がしやすい

地村 感度を高くして気づきを大切にしている点がよかった。報告・連絡・相談につながり、危機管理に有効。家庭への支援については、民生委員や見守り隊とも情報共有して対応している。

(文責：越前町立城崎小学校 山野 裕子)

第6分科会 — 社会形成能力 —

研究課題 社会形成能力を育む教育の推進

研究発表題 豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手を育成するESDの推進

～社会に参画する力・態度の育成を目指すESD活動～

坂井市立鳴鹿小学校長 竹内 利道

I 研究の視点

本校は、平成14年のビオトープ造成から始まり、平成19～21年「学校エコ改修と環境教育」事業を経て、平成22年県内初のユネスコスクール加盟認証、そして、平成23年から学校教育全体でESD(持続可能な開発のための教育)に取り組むなど、環境教育、ESD合わせて19年の歴史がある。研究課題である「社会形成能力を育む教育」は、ESDを推進し、ESDが重視する能力・態度を育成することで実現できるものと考えている。

令和元～3年度のESDでは、次の6つの柱を掲げた。

- (1) スクールプランにESDを位置づけ、地域の特性を生かした「まほろば学習(生活科および総合的な学習の時間)」の実践を継続することで「学校文化」を形成。
- (2) まほろば学習において、教科領域等の横断的つながりも考えた学びの見取り図として年間指導計画「ESDカレンダー」を作成。
- (3) 農業地域としての特性を生かし、地域学習を通して地域への関心を高め、地域に誇りを持たせるとともに、より良くしていこうとする意欲を育む。
- (4) 体験・対話・協働といった学習を大切にし、実践した活動の発表の場として、保護者や地域に学校を開放し「まほろばフェスティバル(学校行事)」を開催。
- (5) どのような未来社会を目指すのかを考えることを学びの課題とする、ESD for SDGs。
- (6) 全教員がESDの認識を共有するための校内研修。

新学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手の育成」が明記されたように、本校でのESDの実践を通して「社会に参画する力・態度の育成」を目指していきたい。

II 研究の概要

- (1) スクールプランにESDを位置づけ…10年
- (2) ESDカレンダー作成…教科領域等横断的つながり
- (3) 農業地域としての特性を生かした地域学習…地域コーディネーター、まちづくり協議会の協力
- (4) まほろばフェスティバル…実践した活動の発表の場
- (5) ESD for SDGs…17の目標、169のターゲット

本校では、全ての教育活動にESDの視点を持ち、自

然や人・地域との「関わり」や「つながり」を通して、「心もからだも健康で、進んで学ぶ、心豊かな児童を育てる」ことを目標としている。令和元、2年度の実践例として、

- ① 生き物と環境のつながりに関わる学習
 - ・1年生: 地域で見かける野生動物生き物調べ。
 - ・3年生: 里山の暮らしと自然との関わりを調査。
 - ・4年生: ごみや水に関する地域の課題調査。
 - ・5年生: 米作りや野菜栽培、水質調査や外来生物調査。
- ② 自分が住む町の文化や人のつながりに関わる学習
 - ・2年生: 町探検で地域の人たちと交流。鳴鹿のよいところ、丸岡城の歴史や伝説。
 - ・4年生: 手話講座、車いすバスケット体験。
 - ・5年生: 防災マップ作成。
 - ・6年生: 六呂瀬山古墳群や鳴鹿大堰の歴史。
- ③ 食と健康に関する学習
 - ・2年生: 季節の野菜を育て、食について調査。
- ④ SDGsに関する学習
 - ・4年生: ごみや水に関して地域の課題調査。
 - ・5年生: 環境と農業、生物多様性、ごみ問題など。
 - ・6年生: 鳴鹿のまちづくりについて、未来の姿を考え、持続可能な開発計画立案。「届けよう服のカプロジェクト」事業に参加。
- (6) ESD校内研修…北陸ESD推進コンソーシアムより講師招聘

III まとめ

(1) 成果

- ・ESDの視点に立った能力・態度を育成することで、自律心、判断力、責任感などの人間性を育む。
- ・まほろば学習で「探究する力 explore」「表現する力 express」「交流する力 exchange」「評価する力 estimate」(4E)を育成することが、社会に参画する力を育成する。
- ・学校全体としてESDに取り組む(Whole School Approach)ことでESDが学校文化となる。

(2) 課題

- ・SDGsとの関連を探ることが不十分。
- ・保護者、地域住民、専門家・研究者との交流推進。

第6分科会 社会形成能力 研究協議記録

研究課題 社会形成能力を育む教育の推進

研究発表題 豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手を育成するESDの推進

～社会に参画する力・態度の育成を目指すESD活動～

発表者 坂井市鳴鹿小学校長 竹内 利道

塚本 ① 地域コーディネーターの人選と仕事は？

② まほろばフェスティバルの提言は？

発表者① コミュニティセンター長。

町づくり協議会、学校、地域をつなぐ。

② 1, 2年生はふれ合ったことをクイズ、紙芝居、ペープサート等で発表。3年生以上は取り組んだことを保護者や地域に提言。

細野 柱が決まっていてわかりやすい発表である。

① 手引き（まほろば学習の流れ）は教師用か、子ども用か？

② 各学年の具体的なテーマは子どもたちの疑問、興味・関心から探るのか。それとも「4年は福祉」というように切り口が決まっているのか。

③ 6年はどのようにテーマを決めるのか？

発表者① 「まほろば学習の流れ」は教師用。

② 各学年の授業（社会、国語等）で取り組むテーマを取り上げてまほろば学習で行っている。4年なら福祉、5年なら米作りをESDの視点で取り組んでいる。

③ 6年生は「教師が投げかける」「出前授業」などのしかけをして課題意識を持たせている。

多田 つきたい4つの力のうち「評価する力」をどのような機会で作成するのか。

発表者 細分化したつきたい力を設定しており、それらをまとめたものが4つの力。活動の後で自己評価をさせる。うまくいかなかったこと、きれいごとで終わらなかったことを、どう乗り換え取り組むのかを考えさせることも必要。相互評価で「関わり方」「友達の良いところ」を評価し協同の力も高めていく。

司会者 社会形成能力・校長のリーダーシップの視点で意見交換を。

北川 勝山市全小中学校でユネスコスクールに加盟しESDに取り組んでいる。「大人になるまで待たなくてよい。今、行動すればいいのだよ。」というスタンスで取り組んでいる。（発表者と同様に農作物、福祉などの取り組みをしている。）地域との関わりで充実を感じ、意識が高まり、地域を大切にする心が育っていく。「大人のつけを子どもたちに払わせることになっていないか」という反省もある。子どもたちが行動を起こす前に教員の意識を変えることも大切。

司会者 地域、郡市、学校規模で取り組みは違うと思うが、持続可能な地域・学校について子どもたちに考えさせる取り組みは？

直井 河野小は全校児童41人。6年生が2人。県のCMコンテストに応募。カメラ、ビデオを子どもに渡し、地域に出て人と関わり、地域のことを知ることと課題がみえた。30秒に何を盛り込むかを一生懸命考えた。一連の流れの中で子どもたちは成長した。「地域の中にどのように子どもを向かわせていくのか」という視点が大切。

服部 南中山小は137名。薬師寺に赤米を奉納。1300年前の木簡が発見され、奈良に赤米を届けていた史実が判明した。振興会（公民館）と連携し「赤米づくりの里」として取り組んでいる。カリキュラムを整えてユニークな取り組みを続けていることで全国表彰を受けた。「人と関わる」というキーワードは社会形成能力の育成に欠かせない。社会や地域と関わり、教員や友達とは違う視点でほめてもらえることできっかけを得る。また、オリンピック選手の見延選手、村上選手を地域が熱心に応援していることで、子どもたちは自分たちにも可能性があることを感じ社会形成能力の素地を養っている。

（文責：越前町立萩野小学校 佐々木 理恵）

研究課題 自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

研究発表題 子どもの自立を図る特別支援教育の推進

福井市清水南小学校長 吉田 宏樹

I 研究の視点

障がいの有無にかかわらず子どもたちが共に学ぶインクルーシブ教育の推進が求められ、特に、障害者差別解消法が施行され、各学校においては、特別な支援を必要とする児童生徒に対する合理的配慮の提供が義務づけられている。

福井市では令和2年度、小中学校に特別支援学級が128学級設置されており、10年前の約2.2倍（平成22年度58学級）となっている。

このような学級数の増加に伴い、市校長会の調査では、昨年度の特別支援学級担任のうち「経験無し」「経験3年未満」の教員は全体の約50%を占めている。このような教員は特別支援教育の専門性が乏しいため、特別支援学級在籍児童生徒の指導に苦慮している場面も見られる。

また、福井市における令和2年度の自閉・情緒学級は69学級で、10年前の約2.7倍（平成22年度26学級）になっている。自閉症やインクルーシブ教育の観点から、特別支援学級の在籍児童生徒が通常学級で交流学习をする時間が増えている。

II 研究の概要

本校は、福井市の南西部にあり、旧清水町内の学校で、ふくい健康の森が山をはさんで反対側にある。明治43年に創設され、113年の長い歴史と伝統をもつ学校で、令和3年度の児童数は74名、学級数は通常学級が6学級、特別支援学級が1学級の計7学級である。

(1) 支援が必要な子どもたちに

①特別支援学級（自閉症・情緒）の児童（6年）

令和元年に特別支援学級が新設され、特別支援学級の担任が配属された。対象児童が入級し、大変落ち着きが見られるようになった。しかし、読み書きやテストの直し、そして行事などの不安なときに、自分の感情をコントロールできなくなると、自傷行為や物を蹴ったり投げたりすることがある。

・デジタル教材の使用

気持ちをリラックスさせるトレーニング法をいろいろ試した。「体の力ゆるめ法」

②通級指導児童について

・2年生から6年生までの児童5名

・通級指導員（再任用教諭）の配置

- ・特別支援学級担任の指導（2時間）
- ・指導時間 週1回から2回
- ・指導内容 苦手な漢字や読み取り、計算や時計の読み取りなど
- ・指導後は、オアシスノートを作成し、保護者に内容報告。家庭と連携を図る。

(2) 全校、みんなで「あさがお」カード

「一人一人が人権を尊重しようとする気持ちを育てる。」「いろいろな人から認めてもらうことで、自己有用感や自己肯定感を育てる。」を目的にする。

あたたかい気持ち・・・あ・・・「ありがとう」

支え合う気持ち・・・さ・・・「さすがだね」

感謝の気持ち・・・が・・・「がんばってるね」

思いやりの気持ち・・・お・・・「応援してるよ」

(3) 清水特別支援学校との交流

- ・4年生が清水特別支援学校との交流を行う。

(4) 教職員の体制整備・情報共有

- ・個別の支援計画ファイルの作成と管理
- ・小学校カウンセラーの活用
- ・毎月の校内支援情報交換会、ケース会議
- ・こども園との連携

III まとめ

(1) 成果

- ・特別支援学級の新設
- ・あさがお活動による自己有用感の高まり
- ・特別支援コーディネーターとしての役割
- ・こども園との連携による早期の状況把握

(2) 課題

- ・専門性の高い教員の配置
- ・対象児童の把握、入級
- ・個別支援の充実の方法
- ・いきいきサポーター、低学年支援員等の増員

個別の支援が必要な児童生徒数が年々増加し、その対応に教職員の心労が絶えない日々が続いている。社会的にも一人一人に対する個別の支援の必要性が強く求められており、教職員の負担感を減らし学校現場の働き方改革を推進するためには、全体の仕事を減らすこと、教職員が担うべき業務を明確にすること、業務の効率化を図ること、そして人員を増やすことが有効と考える。

第7分科会 自立と共生 研究協議記録

研究課題 自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

研究発表題 子どもの自立を図る特別支援教育の推進

発表者 福井市清水南小学校長 吉田 宏樹

北川 清水特別支援学校との交流では、先生だけを招いているのか。また、交流の内容と交流後の児童の変容、先生の変容はどうだったか教えてほしい。

発表者 4年生が福祉体験活動として交流し、相互訪問を行っている。清水特別支援学校の先生に来ていただき、最初に福祉的なことを話していただいている。清水特別支援学校の児童は肢体不自由等、障害の重い子が多く、配慮が必要である。遊びも、ゆりかご的なものや細く切った新聞紙のお風呂的なものを中心になる。清水南小学校の児童も清水特別支援学校の児童も10人程度の交流であり、子どもはすぐになじんですと入って交流している。

虎尾 特別支援学級に入級した児童の入級後の様子の様子の変容と元の学級の変容はあったか。通級指導の教員が1、2年で変わってしまうことが多いがどう引き継いでいるのか教えてほしい。

発表者 入級前は自傷行為があったり感情が爆発したりしたときは担任から職員室に校内電話があり、教頭、校長が出向いて対応していたと聞いている。入級後は特別支援学級担任が出向いて対応している。だいたいうまく対応しているが、それでも収まらないときは管理職を含めた男性教員が対応している。通級指導の担当は再任用の本校の元校長であり、変わっていない。地域や児童のことをよく分かっていて大変助かる。来年度は、再任用がフルタイム勤務になることから、継続して担当してもらえるか不透明な状況で心配である。

西行 通級児童6名は全員通級判定が出ているのか。判定が出ていない児童も取り出しているのか。

発表者 通級判定が出ている児童は3名。担任が保護者と話し、保護者の同意を得て取り出している児童が3名。特別支援教育センターの先生にも授業の様子を見てもらっている。

五十嵐 特別支援、個別支援の中心は特別支援コーディネーターとなるが、仕事が集中したり外部との連絡調整が放課後になったりして長時間勤務になることがある。管理職として働き方改革の推進もしていないといけない中でどのように取り組んでいるのか。また、「あさがお」カードの掲示物の貼り替え等は誰が行っているのか。

発表者 特別支援教育センターの先生に児童の様子を見に来てもらうと、面談も含めて6時近くになることもある。情報を共有可能な場所に入力して報告する時間を短縮している。「あさがお」カードは行事や学年交流が終わると担任が準備している。小規模校なのですきま時間に掲示することが可能である。

(文責：鯖江市吉川小学校 鳥居 秀行)

第8分科会

－ 連携・協働 －

研究課題

家庭・地域・異校種等との連携・接続の推進

研究発表題

家庭や地域と共に歩む学校づくり

～学校だよりと地域人材の活用の観点から校長の役割を考える～

永平寺町志比南小学校長 竹林 保博

I 研究の視点

学習指導要領総則では、『よりよい社会を創るとい
う理念を学校と社会が共有』し、それぞれの学校に
おいて、必要な学習内容をどのように学び、どのよ
うな資質・能力を身につけられるようにするのかを
教育課程において明確にしながら、社会との連携及
び協働によりその実現を図っていくという、社会に
開かれた教育課程の実現が重要になる、と明記され
ている。

令和2年度は、コロナ禍での教育課程の実施とな
り、授業時数の確保が課題となり、家庭や地域との
連携に大きな影を落とした。しかし、見方を変えれ
ばこういう状況だからこそ家庭や地域との連携が必要
であり、どのように関係を築き保つのか、校長の
役割は大きい。「コロナ禍における新たな連携の仕方」
という視点で、校長の役割を考えてみたい。

II 研究の概要

(1)家庭との連携を深める

①学校だよりの役割を見直す

ア 職員の働く様子がみえるよう工夫する。

本校に勤務する全職員の日常の仕事の様子をシリ
ーズで紹介した。なぜそのような仕事が学校に必要な
のかを法的根拠をあげて紹介するようにした。

イ 授業の様子を紙面で報告

コロナ禍で、授業参観が例年より少ない状況が続
いていた。そこで授業参観ならぬ、紙面参観という
形で各担任の授業への熱意や思いを発信した。授業
の様子を伝えることで、親子で共通の話題にしてほ
しいという願いも込めた。

ウ 改善プランをシリーズでお知らせする。

年2回の学校評価で、1回目の評価結果を検証し、
見えた課題をどのように改善するのか、シリーズで
お知らせした。

②緊急メールを活用した危機管理の共有

緊急メールにあるコメント欄の機能を地域の情報
を集める手段として活用した。職員が1人職員室に

いれば、校区内全地区の情報を集めることができる。

1月の大雪の際は、通学路の確保が困難な様子が早
い段階でわかり、該当する地区には車での送迎をお
願いするという判断もできた。

(2)地域との連携を深める

①地域人材の活用と働き方改革の推進

ア 地域人材の活用と授業の効率化

コロナ感染症の臨時休業中、児童クラブが本校の
ランチルームを使用して始まることになった。共に
過ごすことで、指導員の一人がミシンがけの職人だ
ることを知り、ミシンがけの講師としてお手伝い
をお願いすることができた。2人の指導員を含め計
3人で指導ができたことは一人一人に目が行き届き
効率よく作品を仕上げることもできた。

イ 校外学習より校内学習で

これまで校外に出て学習していたものを地元の専
門家を招いて校内で実施することを考えた。やっ
てみると交通費や時間の有効利用など、効率的な学習
ができることがわかった。

②地域人材の活用とキャリア教育

和菓子職人を招いての和菓子作りや地元 IT 企業
の経営者をお招きしてのタブレット講習会を開催し
た。進学を控えている6年生には、大変意義あるも
のとなった。

III まとめ

(1)成果

①コロナ禍での教職員の奮闘ぶりをダイレクトに伝
えることで、活動の意義や教職員の仕事への理解も
深まり、業務改善への理解にもつながった。

②コロナ禍であっても、教科横断的なカリキュラム
の編成により、地域の人材を活用した、効率のよい、
かつ専門性の高い授業が実現できた。

(2)課題

保護者にも学校教育の当事者意識を持ってもらう
ことが大事である。共に学校をよくしていく協力者
として声をあげやすい環境をつくりたい。

第8分科会 連携・協働 研究協議記録

研究課題 家庭・地域・異校種等との連携・接続の推進

研究発表題 家庭や地域と共に歩む学校づくり

～学校だよりと地域人材の活用の観点から校長の役割を考える～

発表者 永平寺町志比南小学校長 竹林 保博

松宮 「学校任せからの脱却」について、もう少し具体的に教えてほしい。

発表者 いろいろ学校から提案するが、「学校が言うならそれでいい」という感じで、少しもどかしく感じている。

松宮 双方向の意見交換を私も望んでいる。みなさんはどの様に工夫されているのか教えてほしい。

早川 学校だよりを何号まで発行したのか、また、働く先生シリーズの反響も教えてほしい。

発表者 昨年度は32号、今年度は今25号まで来ている。週一回ぐらいのペースで出している。働く先生シリーズの地域からの声というのはあまりない。逆に先生方からは良い印象だと思う。

早川 先生方の頑張りを家庭に知らせるというのは、非常に大事だなと共感している。

今川 学校だよりについて、内容的なすみわけが担任の先生方とは何かあるのか。

発表者 記事は一度担任に見てもらって、これでよいか確認をとってから発行するようにしていた。

氣谷 本校では、回覧板に載せて地域の方にも見られているが、先生の学校では、地域にも配布しているのか、地域からの声はあるのか。

発表者 回覧については、昨年度、コロナの影響で出すことはできなかった。代わりにホームページ(HP)にアップすることにした。「おたよりはHPで見ることができます」という内容でお知らせした。地域からの声は家庭・地域・学校協議会で紹介し、その場でご意見をいただいた。

北内 先ほど双方向の意見交換というのがあったが、本校ではブログで「見てね授業」というシリーズで子どもの授業を中心に載せている。そこにコメント欄がある。また、スマホとアンケートを連動させて月一回何か意見をもらう実証実験をしている。年2回の学校評価も携帯端末を利用して情報を集めている。

青木 本校では、ミテログにブログをアップして学校の様子を公開している。その他、阪谷小で育てた野菜を地域の秋市に出店して、大根や野菜にQRコードを貼り付けて、ミテログで学校や畑の様子を発信している。また、福井SDGsに加盟をして持続可能な社会への取り組みを行っている。星空保護区の活動など地域に発信している。

早川 阪谷小のお話があったようにQRコードのことについて、本校は学校だよりにQRコードを貼っている。明らかに見てもらえるようになった。

小林 児童クラブの校内運営、公民館機能の学校移転について、デメリットを教えてほしい。

発表者 児童クラブは、学校の授業と放課後との境目がなくなり、けじめを付けるのが難しい。公民館はまだ機能していない。公民館の活動を校内でやっていくことで、何か作れないかと考えている。公民館サポーターの方が熱心で、学校の畑を活かした話が出てきている。

田中 本校は、公民館を通じてまちづくり協議会や老人会、体協等と積極的に関わっている。職員間の情報がうまくいっていないことがあるので、ここは管理職が束ねて、公民館や地域組織とのやりとりを学校として行うことが大事であると感じている。

板庇 公民館、地域とのつながりについて、本校はまちづくり協議会の方が積極的で、学校での様々な取り組みを、毎月広報で発信してくださっている。

西野 美浜町はふるさと美浜元気プロジェクトという取り組みを3校合同で進めている。国体の時にボート競技があったが、そこで各3校の地域のPR冊子を作って選手や応援の方に自分たちでアピールしながら配った。また、SDGsとからめて、役場と一緒にプラゴミ問題に取り組んでいる。

発表者 地域連携のあり方についてのご意見を参考に、今後バージョンアップして進めていきたい。

(文責：鯖江市河和田小学校 辻岡 義介)